



これだけは押さえない授業改善・指導のポイント

管内の各学校においては、年末、また2学期終業に向け、様々なまとめをされていることと思えます。

今年度、島根県教育委員会は、全国学力・学習状況調査に係る小学校管理職対象の臨時説明会を開催し、調査の趣旨を再確認していただくとともに、結果をお伝えし、学力育成策の再検討、授業改善等についてさらに取組を強めていただくようお願いしたところです。

今号では、この説明会後実施した管内全小学校を対象とした「算数の授業改善に係る学校訪問指導」を振り返り、この訪問指導を通じて明らかとなった授業改善の具体的な方向についてお伝えしたいと思います。

以下のポイントは、

小学校算数科だけのことではなく、小学校の他教科でも大切にされるべきことであり、また、中学校の授業改善にも直接つながる

内容です。小学校の先生については算数以外の教科の指導も含めて、また中学校の先生についてはご担当される教科について本内容を確認いただき、同様に授業改善を進めていただきますようお願いいたします。

学習指導

ポイント1 説明しきる力を育てる。

子どもの説明の足りないところを指導者がいつも補い、子どもの説明しきる力を伸ばしきれていないことはないでしょうか。

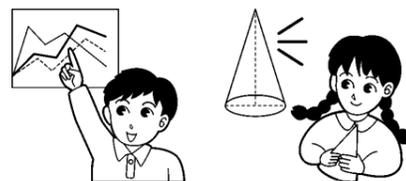
子どもたち同士が子どもたちの言葉で、しっかり討論する活動等を通して、説明しきる力を身につけさせる必要があります。大切なのは、子どもが自分の力で最後まで説明しきる経験を積み上げていくことです。正答のみを取り上げ、「いいで〜す」で素通りしていませんか。必要に応じて問い直し、子どもに詳しい説明を求めることが重要です。また、テストの解答においても、説明が不足しているのに「この子はおそらくこういう風に考えているだろう」と推測し、正答とすることがないでしょうか。

授業中に、子どもたちにどう書けば誰にでも通じる答えなのか考えさせたり、友だちとの意見交流で、過不足ない説明をつくらせたりする経験を積み重ねることで、説明しきる力が育っていきます。

ポイント2 「書く」指導の充実を図る。

授業の中で「書く」活動の充実を図っていますか。
全国学力・学習状況調査等において、島根県の子どもたちが、論理的に記述すること、また条件に沿って書くことが弱いことをご存知のところでは、

このことについて、授業の場では、発問や問題に対し、すぐ発表させるだけでなく、自分の考えを書かせ、自分の考えをまとめさせたり、整理させたりすることが大切です。稚拙な表現でも繰り返し書かせる作業を取り入れ、書いたことについて意見交換をすることで、考える力が伸び、子どもの書く力が育っていきます。また、「書く」指導を続けることで、「書く」ことに抵抗がなくなり、見通しをもち、論理的で、根拠が明らかになった文を書くことができるようになってきます。思考力・判断力・表現力を育成するためには、「書く」指導が欠かせません。



ポイント3 自校の課題を「見える化」する。

調査結果に係る自校の課題をはっきりとらえていますか。
例えば、調査結果に基づき、自校の課題となる教科書の内容部分に付箋を貼ることで、課題についての意識が高まり、指導にメリハリをつけることができます。また、この作業を行うことで、学級担任が代わっても、異動があっても自校の課題が意識され、指導に留意することができます。「目に見える化」と言われる作業です。どの教科でもすぐ取り組むことができます。課題となる内容を系統的に縦で見て、関連する学年の内容に付箋を貼るとさらに効果的です。

授業展開

ポイント1 1単位時間の授業の展開について、見通しをもち、スタイルを確立する。

指導者の導入の説明や子どもの個人解決の時間が長過ぎることで、予定していた展開とならず、本時のねらいが達成できていないことはありませんか。

1単位時間の授業の展開を、めあての確認→問題の提示→個人解決→(ペア・グループ学習)→全体討論→個人での確かめ・振り返り等に設定・確立することで子どもは安心して学習に集中できるとともに、指導者は本時のねらいを達成する見通しをもつことができます。1時間という時間は、限られています。あれこれ欲張るのではなく、ねらいを絞り込み、そのねらいが達成できるように指導に集中することが大切です。

ポイント2 個人解決の時間が長くないよう適切に設定する。

子どもたちが個人解決の場面で問題に取り組む際、長い時間を与えているだけで子どもが何もしていないことはありませんか。

個人解決の時間では、全員が完全な解答をつくるまで待つのではなく、短時間で、何を考え、どこまで考え、何がわからないかはっきりさせるようにします。この個人解決の時間を計画的に時間設定することで、授業にテンポが出て、その後のペア・グループ学習等につなげることができます。

ポイント3 効果的なペア・グループ学習を行う。

ペア・グループ学習を形だけで行っていませんか。
ペア・グループ学習の形態だけ取り入れても効果は期待できません。
ペア・グループ学習が機能する時は、お互いが心を開き、相手の話を心から聞くことが前提となります。解答が誤りであっても、安心して話ができるのは、相手との信頼関係ができてからです。日頃から学級全体でそのような雰囲気をつくる必要があります。
また、単にお互いの意見を言い合うだけでなく、ペア・グループで解決できなかったことを全体に出し、全体で討議するなど展開全体の中でのペア・グループ学習のねらいをはっきりさせる必要があります。ペア・グループ学習は相手を意識して、自分の考えを論理的に整理・説明するとともに、相手の言いたいことを整理して読み取ることがねらいであると言えます。



ポイント4 子どもの言葉で授業のまとめを行う。

指導者だけのまとめで授業を終わっていませんか。
子どもがしっかり意見交換を行ったあと、子どもの発言・言葉をうまく取り上げて、授業のまとめとすることで、子どもの授業の主役である意識が高まります。指導者だけのまとめでは、子どもの達成感、学習意欲は育ちません。

ポイント5 「再現」の指導を行う。

一人一人に学びの手だてを講じていますか。
子どもの言葉でまとめた結論を、一人一人の子どもの学びとするために「再現」の指導が必要です。まとめを見ずにペアで言わせたり、全員の前でまとめを言わせたりします。このことができることで、学びがさらに一人一人のものとなります。子どもの考えでつくったまとめのよい表現を、一人一人の学びにすることが重要です。

